

---

当麻寺金堂四天王像の邪鬼について

－7世紀 - 10世紀の東アジア作例の形式分類をもとに－

---

当麻寺金堂四天王像のうち古様が指摘される持国天像・増長天像の邪鬼について、形式の面からあらためて考察を加える。これまでの邪鬼研究では、東アジアを含む通史的な観点からの検討が十分にされてこなかった。本発表では、7－10世紀における中国・朝鮮半島・日本の邪鬼の形式分類と大陸の邪鬼との造形比較を通じて、当麻寺の二邪鬼の歴史的定位について検討する。

邪鬼の形式は、神将像との関係から「乗せる」「踏まれる」「支える」の3類に大別され、神将像のポーズの変遷とも関連しながら、「乗せる」邪鬼から「踏まれる」邪鬼と「支える」邪鬼へと展開した。この3類は、さらに5種の型に分けられる。「乗せる」邪鬼は、背に神将像を乗せる【台座型】、「踏まれる」邪鬼は、急所を神将像に踏まれる【踏鬼型】にそれぞれ分類される。「支える」邪鬼は、上体を起こし左右対称で両方の掌や肩で神将像を支える【地天型】、左右非対称で、片方の掌や肩で神将像を担ぐ【坦鬼型】、急所を踏まれながらも神将像を担ぐ【坦鬼かつ踏鬼型】に細分される。

大陸においては、8世紀までに5種類の型があらわれ、その全てが10世紀まで継承される。一方、日本においては、7世紀の段階で法隆寺金堂四天王像邪鬼に台座型、玉虫厨子宮殿正面扉二天像邪鬼に地天型、東京藝術大学蔵天王像邪鬼に踏鬼型がみられるが、坦鬼型と、坦鬼かつ踏鬼型はみられず、8世紀以降は踏鬼型が主流形式となる。そこに大陸とは異なる、日本の邪鬼の地域的な特徴が指摘できる。

当麻寺の二邪鬼は台座型である。二邪鬼の材料は櫨かとされ、平安前期の後補ではないかとする見解がある。しかし、興福寺北円堂四天王像邪鬼（791年）、東寺講堂四天王像邪鬼（839年）、東寺食堂四天王像邪鬼（899－909年）など、平安前期の作例では踏鬼型が主流形式となっており、形式の面から、当麻寺の二邪鬼を平安前期に位置づけることは難しい。さらにその造形に注目すると、上体は起こさず、支える動作はともわないが、顕著な左右対称性を示している。これに類似した造形は、龍門石窟奉南洞西壁天王像邪鬼や慶州感恩寺西塔出土舍利具青銅製龕附属の浮彫四天王像のうち多聞天像邪鬼など、7－8世紀の唐と新羅の作例にみられ、当麻寺の二邪鬼は、大陸風をうけた古式な造形を示すものととらえることができる。

当麻寺金堂の四天王像については、その脱活乾漆技法と甲制に関して、奈良時代の定型とは直結しない濃厚な大陸風が指摘されている。こうした四天王像の特質は、まさに台座型の形式と左右対称の造形に、強い大陸風が指摘できる邪鬼に通じるものといえる。以上のことから、当麻寺金堂持国天像・増長天像の邪鬼は、四天王像と共に7世紀末頃に制作された当初作である可能性を指摘できると考える。